

おばあちゃんが麦茶を運んできてくれた。

「うん、なりゆきってどうか……」

あんなに自分には無理だと言った手前、何だかちよっと照れくさい。私は視線を畳に逸らした。

「練習すれば大丈夫よ。語りたい昔話は決まってるの？」  
おばあちゃんの言葉に顔を上げ、私はこくつと頷いた。  
これだけははっきり決まっている。

「『サルとカメ』を語りたい」

きつかけは昨日のこと。

想太先輩、矢崎先輩、風羽ちゃんと私の四人は、学校近くの業務スーパーの価格調査に出かけた。

無事に顧問の先生の許可も下りたハロハロを予算五万円で二百食作るには、どんな具材が使えるのか。その下見だつた。

下見の後、先輩二人は、縁日の会場である公民館に私たちを連れて行ってくれた。

「わー、こんな新しい公民館なんですか？」

「吹き抜けの天井とかおしゃれなんですよ！」

五階の調理室と接客をする多目的室も、もちろんピカピカだ。

ここで私も一日カフェをするなんて……。

何だか、夢みたい。天井のガラス越しに青空を見上げ、心のなかでつぶやいた。

出遅れた高校生活、もう終わったと思つてたのに。

ジョシユア先生と出会えて、フィリピンのことを知つたおかげで、こんなに世界が広がっていく。

そーいえば、と想太先輩が訊いた。

「フィリピンの昔話の準備は順調？」

思わず、ぎくつとしてしまう。自分からやると言つたものの、日が経つにつれ、正直ちよつと腰が引けてきてしまつていた。カフェで昔話だなんて、楽しんでもらえるかな。

「準備は……これからです」

まだ、どの昔話を語るかもちゃんと決めていなかった。

「考えたんだけどさ、同じ階のフリースペースも借りられないかな。立石さんが昔話を語ってる間に新しいお客が入つてくると、気が散るだろ？ その時間帯に来たお客は、フリースペースに誘導すればジャマが入らない」

「矢崎、それいいな。今度公民館の人に交渉してみようぜ」  
先輩たち、そこまで考えてくれてるんだ……。ありがたいこともあるんだけど、急に緊張してきた。

想太先輩が私に向き直る。

「立石さん、フィリピンってどんな昔話があんの？」

「たとえば……『サルとカメ』とか。日本の『サルカニ合戦』に似てるんです。柿じゃなくてバナナが出て来るんですけど」

「へー！ 俺それ聞いてみたいな」